

一写真撮影について

渡部里美

探検活動において記録というものは非常に重要な事である。どのような状況を克服したとしても、そこに何ら記録が残っていなければ探検にはならない。そこが他の活動とは明確に違っている。確かに冒険も探検も主体的、主観的な事だから、人が知ろうと知るまいと認めようと認めまいと関係はない。しかし学術的見地から見たら、記録のないと云う事は無に等しいと云う事だ。その点だけでも記録は重要と言えるだろう。そして、記録の一つとして写真は有効になってくる。

今回の横断航行といった活動形体、つまり移動を前提としたものは、より正確なミスのない記録が必要になってくる。なぜなら2度と同じ場所で同じ事を同じ時間にする事ができないからである。その点から言ったら、写真撮影に関しては成功したとは言えないだろう。一つには自分が使用するカメラに関して知識が少なかった事。結果としてはフィルムのから回りによる撮影ミスである。二つにはカメラ台数が少なかった事。もちろんこれには経済的理由もあるし、重量の問題や破損しにくくする気高いがいるという事もあったが。三つ目は露出計等の他の機材を必要にもかかわらず持って行かなかった事。この結果露出不足やオーバーが多かった。四つ目はメンバー全員に撮影技術が徹底していなかった事である。これらの事は活動形体によって無理な点もあるし、互いに矛盾している点もある。しかし努力によっては解決してゆける事であると確信している。

▷使用機材△

カメラ

※ニコノスⅡ（日本光学工業K.K）

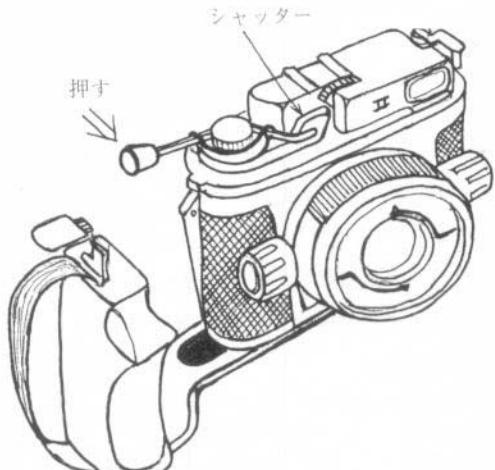
全天候水陸両用、6気圧に耐える

完全気密構造

レンズ・Wニッコール35mm F 2.5

サイズ・129×97×69mm

重量・700kg



これに右手用のハンドクリップを付け、片手で持ちシャッターが切れるようにした。ニコノスⅡはシャッターボタンがなく、レリーズも取り付け不能なために図のような改良を加えた。

カメラボックス

※キャノネット28 (キャノンK.K)
コンパクトなプログラム式EE機
構・連動距離計内蔵
レンズ・40mm F2.8
サイズ・120.5×75×61mm
重量・540g

※米国海軍使用弾薬入れ
完全防水・鉄製
サイズ・300×155×185mm
重量・3000g
内部にウェットスーツのゴムを張り
クッションを付けた

フィルム

※コダック・エクタクローム
カラー・スライド・フィルム
ASA・64
20枚撮り 10本

※フジ・ネオパンSSS
白黒・フィルム
ASA・200
20枚撮り 19本

結果的に白黒フィルムの方は19本撮影中、1本だけ完全に没、3本は露出不足が目立ち、1本は光もれの部分が見られた。プリントできる絵は218枚であった。また、丸々1本のフィルムが没であったために、その間の写真がないと云った失敗をしてかした。カラーに関しては全部スライドであったため、ASA感度が低く、ニコノスが使用しにくかったので川の中での活動やボート上の活動が撮りにくく、かなりかたよったものになった。10本中3本はフィルムから回りの為3枚ほどしか写ってなく、それも大切な部分の写真がないという重大なミスを演じている。

また、広角レンズのみ使用しているので、かなり小さく写っていて迫力が感じられない気がする。一眼レフカメラがこれからは必要になってくると思うし、フィルターを使うなどの技術をさらにマスターすべきであると感じている次第です。

— 8 mm 摄 影 —

西 口 進 三

今回使用した 8mm は、キャノンオートズーム 518 SV である。これを購入して 4 カ月ほどたって、フジカから防水カバーのついた 8mm を売りだした。誠に残念だ。防水であるならどれほど便利であるか今度の合宿で思い知らされた。まず富士川において、酷暑、酷熱などと云い換えたくなる自然のもとに喘ぎながらかつまた 8mm をキスリングのセンターにしまっていたため、取り出すのがとてもめんどうなものになってしまった。私のキスリングのタッシュだと出し入れがとても簡単だった。しかし、重いキスリングを背おって撮影のために走り回るのはおっくうになる。怪奇にして異様なる手こぎの川上りの撮影は、川沿いの道路の上から撮った。全般にボートとの距離があったので、ズーム利かせたがもう一つ迫力に欠けていたような気がする。少し大きめの三脚を持っていたのだが、キスリングのセンターにしまい込んでいたため、取り出すのがめんどうなのと周囲が早くしろと焦らすので、三脚をあまり使用しなかった。やはりブレが目立つ。防水ではないためファルトボートの中には持ち込まなかった。沢に入ってからは、フィルムの制限もあるし、撮影のためにあまり時間を取ってはならぬ。しかし、キスリングを背おって 8mm 片手に走り回るには、それだけの元気はなかった。ただこの沢の撮影で失敗したことは、1 シーンだけ視度調整にミスを犯してしまったことだ。滝を上る所を、少し離れた山の上から撮った時にだ。視度調整ができているかどうか自信がなくて少し焦ったためだ。これはカメラに対してまだ親しんでないためのようだ。下山の撮影をしなかったというか、する暇がなかったというか、早く下山したので、こちらは付いていくのにとにかく必死だった。沢における撮影は、やはり撮影者がカメラと三脚を持って撮影に専念するか、いろいろ忙がしいでしょうが撮影のための時間を持ってもらうかだ。カメラと三脚だけで撮影に専念するということはどこにおいても言えることでプロや他のカメラマンはどうしているのか知らないが、私としてはあの怪奇にして異様なる巨大キスリングを背おって撮影し回るには少しその気を無くさせる。千曲川、信濃川における川下りのときはパッキングの際にカメラが水に濡れてはならないため完全密封をしなければならないので、多くの撮影チャンスを逃がしてしまったようだ。また、瀬を出た直後、即座に後からくるボートを撮ろうとしてもカメラを終い込んでるためもはや手遅れだ。なお今回のパッキング方法はカメラケースを薄手のビニール袋 2 枚で覆いそして厚手のビニール袋に包んだ。さすが水が掛かったくらいではだいじょうぶのようだが、転覆でもしてもカメラがだいじょうぶかどうか保証はない。この防水でないカメラのよりベターなパッキングが大きな課題だ。それからボートの中から撮るには、どうしてもブレる。このブレをどのようにして克服するかこれも問題だ。不満と不安の念が増してきた合宿後半においてとても 8mm を取り出して撮ろうという気が起こらなかった。この映画は、記録映画で感動でなものにはあまり関係なく記録そのものに重点をおいていたが全体的に言えば、淡々と映画が流れて行くという感じで迫力に欠けていた感がある。今回は無声だったがトーキー化にいどんでみたいと思っている。